

令和7年度 豊橋技術科学大学第三年次入学者選抜学力検査問題

一般科目（国語）

注意事項

- 一 試験開始の合図まで、この問題冊子と解答用紙を開いてはいけません。
- 二 問題冊子の枚数は、表紙、草稿用紙を含めて十八枚です。解答用紙は七枚あります。
- 三 問題は大問が三問あります。全問解答してください。
- 四 試験開始の合図の後すぐに、すべての解答用紙の所定の箇所に受験番号を記入してください。
- 五 解答は必ず解答用紙の所定の欄に記入してください。所定の欄以外に記入した解答は無効です。
- 六 解答は楷書で正確に書いてください。判読に迷うものは不正解となる場合があります。また、選肢の解答に際して、カタカナをひらがなに変更するなど、次のような変更は不正解となります。  
(例) ア ↓ あ      A ↓ a
- 七 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあれば、ただちに申し出てください。
- 八 問題冊子の余白は、草稿用として使用しても構いません。
- 九 試験終了時刻まで退出してはいけません。
- 十 問題冊子は持ち帰ってください。

(草稿用紙)

【一】 次の「心と時間の関わりについて」の哲学研究者の文章を読み、質問に答えよ。なお、原文から一部省略した箇所がある。

時間のしおり

少し恥ずかしいのだが、①あまり共感を得られないであろう自分の癖の一つを書いてみる。日常生活のなかでふと、周囲に聞こえないくらいの声で「今」とつぶやく癖を私はもっている。正確な②ヒンドはわからないが、A 一日に一度はこれをやっているはずだ。これはあくまで癖なので、明確な意図は伴っていない。しかし、「今」とつぶやくとき、私の心がどんなふうであるかを述べることは価値があるだろう。1、心と時間との関係を考えるうえで、この癖にまつわる心理を見ることは、あとあと意味をもってくるからだ。

B 「今」とつぶやくとき、大まかに言って私の心は二つの作業をやっている。第一の、②より説明しやすい作業は、「今」に注意を引き戻すというもの。いま目の前の状況こそがまさしく「今」の現実であると自覚し、過去や未来への雑念、あるいはその他の空想から現実<sup>あ</sup>に心<sup>あ</sup>を向け変えるうえで、

ある科学論文によれば——あくまで限定的な調査結果ではあるが——人々は生活の半分近い時間を、目の前の現実と関わりのない思考に費やしているとされる。こうした心のさまよいは「マインド・ワンダリング」と呼ばれており、近年では多様な角度から研究が進められている。先記の作業は、マインド・ワンダリングから自分を呼び覚ますものと言えるだろう。

第二の作業は少し説明が難しい。その作業において、私はいわば、③自分の人生に時間的なしおりを挟んでいる。ここまで読んだというしるしで本にしおりを挟むように、ここまで生きたというしるしで人生にしおりを挟むわけだ。そんなことがわざわざ必要なのは、人生全体をどこまで生きたかが何となくボンヤリしているからだが、このボンヤリ感<sup>あ</sup>はマインド・ワンダリングにおけるそれと、だいぶ質が異なっている。

マインド・ワンダリングにおいては、この「今」という自分の時間的な足場はきちんと確保されていると言ってよい。2、その足場をしっかりと見ずに、あちこちを散漫に眺めているわけだ。だから、注意を「今」に戻すとき、戻すべきところがどこなのかは、

けっしてボンヤリとしていない。

これに対し、「今」というしおりを挟むことには、どこが足場であるのかを明確にする意味がある。たしかに、こゝまで生きたのであり、だから、ここが「今」なのだ、自分に教え直す意味が。認知症の祖母と暮らした経験から言えば、自分がいつの時期の自分かわからなくなっている認知症患者は、人生という本の間違ったページを⑤ガンゼンに開いてしまっており、その誤りを正すためのしおりも所有していない状態に見える。

私は現在、認知症でなく、自分がいつの時期の自分かわからなくなることもないが、おそらくは、④いま開いているページの開かれ方が若干弱い。だから、ときどき、このページを開いているものの「本当に今はこのページだったか？」と疑念を持つ——そしてしおりを挟む——ことになる。③、私はそのことであまり辛い気持ちにはならない。むしろ私的にはこの疑念は「ドッキリ」番組のような明るさをもっており、⑤急にやって来たテレビタレントに「あなたがここまで生きてきた、というのは冗談でした」と言われて「なんだ」と笑うような心象を伴っている。

ところで、認知症の事例についてひとこと。自分がいつの自分であるか分からなくなっている人物は、通常、自分を過去の自分と取り違えており、たとえば、すでに老人なのに自分は未成年だと思ったりする。これは、未来の自分の記憶というものがない以上、とても自然なことだろう。ただ、私が祖母の言動でもっとも印象に残っているのは、彼女自身を弔う火葬場に行くので皆も早く支度をしろと、い。

そのとき祖母は過去ではなく未来のページを開いており、しかも自分の⑥リンジュウより先のページを開いていたのだが、しかし、この間違いを除けば、家族を叱るその内容は C 整然としたものだった。祖母はこの叱責を数年のうちに幾度も行なったので、彼女なりのストーリー（一貫性）がそこにはあったように思う。

「速い」と「早い」

「今」というしおりを人生に挟むとき、私は、どの時点が「今」かを意識しているだけでなく、どの諸時点を「今」が通過してきたかも意識している。⑥「ここまで生きてきた」というのは冗談」との心象をもつとき、その冗談性（虚構性）の重要な部分を、この「通過」への意識が担っている。

私は昔、小学生であり、中学生であり、高校生であった。三年の空白期間を経て、大学

に入り、大学院に進み、結婚をし、就職をした。数年前までは山口大学の時間学研究所という機関に勤めており、その後は京都大学の人間・環境学研究所に勤めている。

こんなふうに私が生きてくるあいだ、「今」もまた、それらの日々を通過してきたはずだ。いや、むしろ、「今」が通過することによって私は、その各々の日を「今」として生きるこゝとができたように思われる。しかし、こう記しながら、私は次のように問わざるをえない。通過した、その「今」って何だ、と。先記の日々を「今」が通過したとは、いったい、

う。

読者を置き去りにしないよう、いくつか個別の話題を経ながら、少しずつこの問いに近づいていこう。多くの人が、①カレイとともに時間の過ぎるのがはやくなったと言う。二十代の十年に比べて、三十代の十年はあつという間。四十代の十年はさらにはやい——。こんなふうに述べるとき、人々は時間の過ぎていく速度を感じているかのようだ。

だが、⑦そこで人々が感じているのは、速度というより短さである。つまり、二十代の十年より三十代の十年のほうが短く感じられる、といったことを、後者の「はやさ」として表しているわけだ。こうした短さの感覚は複数の要因をもつだろうが、そのなかでも、当該の期間に生じた出来事の質・量はとくに興味深い要因である。(心理学の知見では、たとえば、印象的な出来事が少なかった期間ほど、あとで振り返ったときに短く感じられる傾向がある。)

ここで一つ問題を出そう。「時間が過ぎるのがはやい」という文の「はやい」は漢字でどう書くだろうか。「速い」だろうか、④、「早い」だろうか。

出版物での用法を見ると大抵は「早い」が使われている。⑤カンヨウに従うという点では、こちらが優勢と言えるだろう。しかし「速い」も見ないわけではなく、漢字の意味を考えると、え。

D 運動や変化がすばやく起こるとき、すなわち速度が大きいとき、私たちはそれを「速い」と表記する。他方、基準となる時間より前であるとか、ある期間の最初のほうであることは、「早い」と表記される。それぞれ例を挙げるなら、「彼は走るのが速い」、「彼女は起きるのが早い」といったように。

「時間の過ぎるのがはやい」と言うとき、⑧素材に考えるなら、そのはやさは「速い」と書くべき何かであるはずだ。時間の流れという比喻を使うなら、その流れこそが速いわけである。しかし、河の流れの速さを見るように、時間の流れの速さを見ることはできない。そもそも速さの認識とは、ある特定の時間における運動や変化の量(たとえば一定の時間

に流れる水の量)の認識なのであり、時間に関してそうした速さを認識するというのは奇妙である。

特定の時間における「時間の変化の量」とは、まさにその特定の時間にほかならない。一分間における時間変化の量は一分間、一時間における時間変化の量は一時間……、ここには「速い」も「遅い」もありえず、いったい何を使って何を計っているのかも明確ではない(一メートルにおける空間変化の量が一メートル、と言うのが意味不明であるのと同様)。

⑨時間の過ぎるのが「早い」という表記が優勢であるのは、河の流れの速さのように時間のそれを感じることはできず、ある出来事が思ったより早く生じたとの思いを経たのみ、過ぎた時間の短さを感じるからだろう。5、四十歳の誕生日がE早くやって来た——まだまだ先の気がしていたのに——というときなどのように。

無意味な「二倍」

時間が流れていく速度を見ることはできない、と私は述べた。しかし、いま目の前にある世界は変化し続けているように見えるし、その変化には一種の速度があるように思われる。もし、あなたの目になっている草木がすごい勢いで背を伸ばし、あなたが瞬きをするほどのあいだに太陽が空を横切つて日の出と日の入りを繰り返すようになったらどうか。草木や太陽だけでなく、周囲のあらゆる対象がこんなふうに早回しで変化するようになったら——。時間が高速で流れるのを見るとは、こうした経験ではないだろうか。

⑩そうではない。いま記したような経験は、あなたの心身の変化速度とその他の事物の変化速度の比率が大きく食い違ったときに生じるのであり、時間そのものの流れの速度とは関係ない。

もし仮に時間が二倍の速度で流れ出し、あらゆる事物の変化が倍速になっても、だれもそれに気づかないだろう。私の心身の変化に対し、他のすべての事物の変化が倍速になることは理解可能だが(このとき私は倍速になった外界の変化を見る)、私の心身を含めた万物の変化が倍速になるとは、⑪結局、何も起こっていないのと同じではないか。むしろ、この想定に対しては、「なぜ二倍になったと言えるのか」と問い返すのが適切である。その「二倍」という表現は、お。

二倍ではなく十倍でも百倍でも、いま述べたことはもちろん変わらない。「時間が幾倍か

の速さで流れる」ということは、意味そのものがまず不明瞭であるし、たとえば、それが実現したとしても、その効果は認識不可能だろう。とはいえ、このことをふまえると、次の疑問が生じてくる。時間が普通に流れること、すなわち、「今」が一倍の速度で時間軸上を移行行くこともまた、認識の内容に無関係ではないのか。だとしたら、私たちが普段、「動き」として認識しているものは何なのか――。

青山拓央『心にとって時間とはなにか』（講談社現代新書 二〇一九年）より

問一 傍線部①～⑤のカタカナ部分を漢字にした際、その単語に含まれる漢字と同じ漢字を含んでいる単語をア～オの中から一つずつ選べ。

① ヒンド

ア 貧弱 イ 瀕死 ウ 京浜 エ 最頻 オ 翻意

② ガンゼン

ア 彼岸 イ 銃眼 ウ 頑固 エ 元来 オ 含意

③ リンジュウ

ア 拡充 イ 重責 ウ 降臨 エ 倫理 オ 入内

④ カレイ

ア 苛烈 イ 怪訝 ウ 麗人 エ 中華 オ 加算

⑤ カンヨウ

ア 寛大 イ 容赦 ウ 習慣 エ 要領 オ 感服

問二

1 ～ 5 に当てはまるものとして最もふさわしいものを一つ選

び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

ア たとえば イ ただ ウ それとも

エ というのも オ とはいえ

問三

A ～ E に当てはまるものとして最もふさわしいものを一つ選

び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

ア 何らかの イ とても ウ それなりに

エ 少なくとも オ 思わず



問四

あ く お に当てはまるものとして最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

- ア 私たちを叱ったことである
- イ 明確な意味をもはや失っているからだ
- ウ 「今」というつぶやきは引き金トリガになっている
- エ 何がどうしたということなのか
- オ どちらが正しいのか分からなくなってくる

問五

傍線部①について、筆者が「あまり共感を得られないであろう」と書いているのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 筆者が時間の流れに自覚的であるという哲学的な考え方を持って活動しているため。
- イ 自分の行っている癖が特殊な行為であり、他の人には説明しなければ理解されることはないだろうということを強調するため。
- ウ 多くの人は時間の流れを強く意識して普段の生活を送っているわけではないが、「今」が「今」であるということとは重要であるとわかっているため。
- エ 自分の癖ではあるが、無意識ではなく自覚的にやっている行為であり、本来の癖の定義とは異なるため。
- オ 筆者の心と時間の存在を確かめるための癖であるが、その確認をしても筆者以外の人には決して伝わることはないため。

問六 傍線部②について、筆者が「より説明しやすい作業」と書いているのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 過去や未来への雑念は誰にでもあるので、そこから現在の状況に意識を引き戻したいという理由も経験的にわかりやすいと考えているため。

イ 自分の行動に対して全体の注意を引きつけたいという気持ちは多くの人も日常的に持っているものなので、納得しやすいと考えているため。

ウ 自分自身の気持ちを現実に戻すための言葉としての「今」は、誰にとつても共通しているものだと考えているため。

エ 空想と現実との区別をつけるためには、「今」の自分を見つめ直すことが一番大切でありまた簡単な作業であると考えているため。

オ 過去のことに関われすぎたり未来のことを心配しすぎたりする人の心を上手にコントロールするためには現在に集中するしかないと考えているため。

問七 傍線部③について、「自分の人生に時間的なしおりを挟んでいる」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の人生の区切りを一つ一つ記憶し、新しい次の瞬間を前向きに生きていけるように自分自身を見つめ直すきっかけを作っているということ。

イ 自分が今まで生きてきた時間の感覚がはつきりしないような意識を抱えているため、今の自分がどのような心を持っているかに向き合うための合図を送っているということ。

ウ 将来、自分の人生の出来事を正確に振り返るために、本にしおりを挟むかのようにはつきりした記憶の跡を頭に遺そうとしているということ。

エ 今にいたる自分の人生の曖昧さを払拭するために、自分が今生きている時間がいつ、どんなものなのかを見つめ直し確認しようとしているということ。

オ 人間の精神活動と時間の関係とは近年様々に研究されているので、その研究を自らの意識で実証調査しようとしているということ。

問八 傍線部④について、「いま開いているページの開かれ方が若干弱い」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 今の自分と過去の自分とをはっきり区別するための客観的な証拠は存在しないので、あいまいな記憶に頼らざるを得ないということ。
- イ 自分の把握している「今」と、周りの人々の把握している「今」との間で、ずれや食い違いが生じているのではないかという不安が存在しているということ。
- ウ 人間の脳は記憶について曖昧になりがちなので、自分が把握している「今」が、実際とは異なる過去のこととして記憶してしまうかもしれないということ。
- エ 自分が自分であるということを確認し続けることは、人間の主体性を守る上で重要であるが、ときどきその主体性がぼんやりしてわからなくなること。
- オ 自分が間違いない「今」という瞬間を生きているのかどうか、確信が持てず不安になることがあるということ。

問九 傍線部⑤について、「なんだ」と笑うような心象を伴っている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分の人生や自分の時間が本当に存在するのか、という根本的な問いかけをする場合、それらは自分の主観の中にしか存在しないものである以上、他者から「冗談でした」と言われたら、その意見も認めるしかないということ。
- イ これまで過ぎ去ってきた時間が確実に存在したことを証明することはできないので、それが冗談であると言われたとしても笑うぐらいしかできないということ。
- ウ 今の時間が不確実であることに不安を感じる一方で、不確実であるために、それが真実であるかどうかを確かめたいという気持ちよりも、楽しいか、明るいものかといったことの方を重視しているということ。
- エ 時間や人生の存在は不確かなものだと自覚しているので、冗談だったと指摘されたとしてもやはりそうだったのかと納得してしまうだろうということ。
- オ 時間や人生が実在するのかしないかを気に病む必要はなく、その存在を疑うこと自体に人生の面白さが存在しているということ。

問十

傍線部⑥について、「その冗談性（虚構性）の重要な部分を、この「通過」への意識が担っている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分が生きてきた一つ一つの瞬間は直ちに過ぎ去っていくものだと意識すること  
で、「今」の存在が不安定なものに感じられるようになっていくということ。

イ 自分の生きてきた時間を冗談であると言われてその通りだと感じてしまう心性  
は、時間は常に動いているため、通過したかつての「今」について後から確認す  
ることの不可能性に基づいているということ。

ウ 十年、二十年と生きていくうちに、記憶は不確かになったり書き換えられたりし  
ていくもので、自分が真実と思っていたことが間違っていることもよくあるの  
で、そんなに気に病む必要はないということ。

エ 長い時間を生きていくと、どこかで記憶上の矛盾が発生してしまうが、人間の頭  
脳はそれを都合良く解釈して改変してしまうことがあるので、そうした頭脳の働  
きによって、時間の把握は難しくなっていくということ。

オ 過ぎ去った時間、人生が本当に存在するものであったのかと自問することがある  
のは、時間や人生の変化や展開の感じ方が、その時その時によって変わっていく  
ためであるということ。

問十一 傍線部⑦について、「人々が感じているのは、速度というより短さである」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 時間にはやさが存在すると感じとる人は多いが、それは過ぎてしまった大切な時間を惜しむ気持ちが錯覚させているのだということ。

イ 多くの人は、印象に残った出来事が多い時期については、その時期の時間が速く過ぎたと考える傾向をもっているということ。

ウ 大人になって「若い頃は一日、一年が長かった」と言う人は多いが、一方で「大人になってからの方が時間を長く感じる」と言う人は少ないということ。

エ 時間に速度は存在しないので、人間が時間のはやさだと感じているものの実態はそれが長いか短いかという期間の問題であるということ。

オ 歳をとればとるほど、人生の長さという分母は大きくなるので、その分時間を短く感じるようになるのだということ。

問十二 傍線部⑧について、「素朴に考えるなら」という表現は、どのような意味で用いられているか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間の感覚に素直に従って提案された意見とは、ごく当たり前のものになりがちなので、それを否定することの難しさを示す意味で用いられている。

イ 一般的に言うときと難しいことではないのだが、かえってそのために、一般論自体を常に疑うことの必要性を訴える意味で用いられている。

ウ 多くの場合に当てはまる見解に対して、それは正しいように見えて表面的で単純な考え方であり、正解は別なものであることを暗示する意味で用いられている。

エ 問題を複雑にとらえず、単純に理解しようとする、本質を捉えられないこともあるのだということに注意喚起する意味で用いられている。

オ 素直な意見だという言い方をするので、他者の意見や見解を上から批判する意図をやわらげつつ、皮肉を込めた指摘をしようという意味で用いられている。

問十三 傍線部⑨について、「時間の過ぎるのが「早い」、という表記が優勢である」のはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 「流れる」という比喻からは「速い」という表現が適切ないように見えるが、それも「流れる」という動作ではなく流れた後の感覚を意識しているだけだから。

イ 時間の単位量は不変であり、一分一秒の長さが変化することはないので、「速い」という意味に捉えると時間を適切に表現できなくなるから。

ウ 人間は時間の「速さ」を意識することによって、動作の開始と終わりを把握し、過ぎた時間の長短を表現する感覚を持っているから。

エ 人間は必ず歳をとっていくが、自分の歳の変化の瞬間を常に感じ取れるわけではなく、一定期間が過ぎた後にその期間の「短さ」だけがわかるから。

オ 実際には時間の「速さ」を感じているのではなく、ある出来事が発生するまでの期間が思っていたより「短い」と感じ取れたことを表しているから。

問十四 傍線部⑩について、筆者がここで「そうではない」と述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 時間が流れていく速度を人間は見ることができないので、時間の速度を感じたと考えることは間違っているため。

イ 時間の速度が速くなったと感じ取ったとしても、それは個人の体感する変化と周囲の変化との間のギャップに過ぎず、時間そのものの速度ではないから。

ウ 時間の速度というのは一時間、一分、一秒の変化の量であり、体感の変化速度によつて感じ取れるものではないため。

エ 自分の感じる時間変化と周囲の時間変化が大きく食い違うとき、時間の早さを体感することができるが、それは客観的に証明できることではないため。

オ 仮に世界の時間が変化したとしても、それを感じ取る人間の時間も変化することになるので、そこで生じる速度の差を感じ取ることは不可能であるため。

問十五 傍線部⑩について、筆者が「結局、何も起こっていないのと同じ」と考えているのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 時間に速度があってもなくても、人間には認識することができないしまたその必要もないので、変化について考える必要性がないため。

イ 時間の速度が変わったことに気付けたら、気付けた者の時間の速度だけが変化していないことになるが、それは明確に物理法則に反しているため。

ウ 時間の速度を感じ取れるという意識自体が主観の産物であり、実際には時間の変化は全く感じ取ることができないものであるため。

エ もし時間に速度があるとしたら、様々なものがそれぞれの速度で変化して、変化の差が生じてしまうはずだが、そんなことは起きていないため。

オ 時間に速度があり、その速さが変化したとしても、時間は全てのもの・ことに対して同じように通過していくので、その変化自体に気付くことができないため。

【二】 次の(一)～(五)の単語の対義語になるように、ア～コの漢字を正しく組み合  
 わせて単語を作り、記号を記入せよ。ただし、12、34、56、78、910の  
 それぞれが正しい単語になっている場合のみ正解とする。

(一) 過失 ⇕ 12

(二) 暗愚 ⇕ 34

(三) 違反 ⇕ 56

(四) 巧遅 ⇕ 78

(五) 崇拜 ⇕ 910

ア	故	イ	拙	ウ	意	エ	遵	オ	軽
カ	守	キ	明	ク	侮	ケ	速	コ	聡



【三】 次の(一)～(十)の文章に関連する最もふさわしい四字熟語をア～コの中から一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

(一) 彼は努力も勉強も行動もしていないのに、自分はすぐに起業に成功して大金持ちになり、優雅な生活を送れるようになるだろうと言いつらしている。

(二) 四年前のオリンピック予選ではわずかの差で負けてしまったが、あきらめずに練習を重ねて、見事オリンピック代表の座を勝ち取った。

(三) バスケ部のキャプテンは、全国大会の際、前半で三十点も差がついて落ち込むメンバーに対しても「まだチャンスはある」と落ち着いて指示を出し続けた。

(四) 高橋さんは、ケチで細かい鈴木部長が全く尊敬できないと私に言うのだが、出世のためだからと、いつもお世辞を言って付き従っている。

(五) 大切な打ち合わせがあるのに、近藤はすこし擦り傷が出来た程度のことを大げがをしたかのように騒いで「今日は行けない」と欠席した。

(六) メロスの妹が暮らす国の人々は、暴虐で横暴な国王の統治に不満を抱いていたが、国全体を傷つけないので、反乱は起こさずに暮らしていた。

(七) いつもおとなしくて自分の意見を出せない人だと思っていた山田さんが、社内でどれだけ開発は不可能だと批判や圧力をうけても方針を変えずにプロジェクトをやりぬいたことには驚いた。

(八) 私の恩師は、文系理系問わずどんな分野にも精通し、どの学生の発表や論文にも的確な批判や助言を与えてくれた。

(九) 私の父は、中国、韓国、台湾のメーカーが次々に優れた新製品を出している現在でも、日本メーカーの製品が最も良いと信じてそれしか買おうとしない。

(十) 就職活動でなかなか内定が得られないので、内定した友人達の真似をしようと思つたが、自分の個性を押し出す方が大切だと思ひ直した。

ア 外柔内剛    イ 隠忍自重    ウ 旧態依然    エ 面従腹背  
オ 泰然自若    カ 空中楼阁    キ 博覧強記    ク 針小棒大  
ケ 捲土重来    コ 桜梅桃李